

サマネイ・続編

多谷昇太

【(六・僧房)の続き】

「グッドイーブニング、デイスイズユアネイバー、ナイストゥミークチュウ」と流暢な英語で挨拶をしてくれる。「オウ、グッドイーブニング、ナイストゥミークチュウ」と返す。これ以後の会話は互いに英語で為されたがここではカタカナで記す。もちろん俺の英語は拙く相手は流暢であることを念頭に置いてもらいたい。ヒアリングに関してもご同様に理解できないことも間々あったがここでは想像を効かせた。「ハイツテモイイカイ?」「モチロンダ。ドウゾハイツテクレ」のやりとりの後で彼を部屋の中に招じ入れた。腰に当ててもらおう敷き物もなにもなく卓袱台もない。しかし彼は何も気にしないようすで俺たちは互いに目を合わせながら床に座り込み胡坐をかい対座した。コーヒーの匂いやタバコのそれ、ひよつとしたら開けた缶詰のそれまで気づいたのに違いないのだが彼は何も云わない。俺はちよつと決まり

悪げに咳払いをしてからまず自分の名前と国籍を告げた。「ケン、ザブ：ロー?」発音しにくそうに彼がそれを云う。「イエス、ケンザブロウ、ムラタ」俺は名前をくり返した。どちらが名でどちらが姓かを云つてから「タダ、ケントヨンデクレ」とつけくわえる。こんどは彼の番だ。「ジブンハスリランカジンデ、ナマエハ(こ)こまでは容易に聞き取れたがそのあと)×××××々々々」と早口で一氣に自分の名を告げた。しかしジャスト長くて、ほとんど落語の「じゅげむじゅげむ、ごころのすりきれ：」の類。また自前のスリランカ語をそのまま云うので何を云ってるんだかさっぱりわからない。彼にしてみればその辺はおりこみ済みのようで、正式な自分の名前が非常に長いものであることをただ披露したかったのだろう。直後に俺同様に「タダ、チャンドリカ、トヨンデクレ」と云つて微笑む。その対座する彼の醸す雰囲気がいかにいい。人を、他人を受け入れよう、理解しようとする姿勢がいかににもじみ出ている、間わず語り風に俺は自分のことを彼の前で語った。もつとも折々短く、此処までの経路は?とか、それを聞くと、ではヨーロッパはどうだった?などと聞

かれたからなのだが、とにかく柔和な仏像のごとくに終始受容的だった。しかしあとからして思えばそれは俺の英語が拙いことを彼がすぐに悟ったからであり（前述の通りヒアリングがまったく成ってないことを）、聞き手に徹するしかなかったのかも知れない。その時はそれに気づかず、自分がほぼユーラシア大陸を一周して来たこと、ヨーロッパで1年半ほど過ごしたこと、バイトしたこと等を語り、果てはヨーロッパ人は有色人種を差別することまで一方的に語る始末。彼のことを尋ねることはほとんどしなかった（もつとも尋ねても聞き取れなかつたらうが）。興味深そうにすべてを聞いてくれたが今にして思えば「この無神経者め」とおのれを責めないということはない。最後に「ナンデ、ヨーロッパニイツタ？」と聞かれ、またぞろランボー云々を語ろうとも思ったが俺の英語では不可能と思い、「ペインティング」とだけ答えるに止める。彼は方眉を上げてサプライズを示してくれたものの、もはやこれ以上の会話の不成立を思ったようだ。挨拶を云って立ち上がるような素振りを見せたが一瞬ベッドわきにあった卓上小物入れに目を止めた（部屋の装備品）。その

上に置いてあった英文の本に興味を示す。「ソノホンハ？」「ノベル（小説）ダヨ」「ノベル：チョットミテイカイ？」俺の了解を得てからそれを手に取りページをめくり始める。その本は「アルバータとヤコブ」という題名のスウェーデンの作家が書いた恋愛小説である。おそらく映画にもなったのだろう、表紙には船乗り姿のヤコブと畳んだバラソルを持つ貴婦人姿のアルバータの写真が使われていて、ヤコブはアルバータの腰に手をまわしている。別れの場面なかどちらもシリアスな表情をして互いを見詰め合っているという、とてもいい写真だった。実はその本は俺がスイスでアルバイトをしていた折り、カトリーヌという名の同僚の婦人がくれたものなのだ。40前くらいのスイス婦人で金髪の美人。ホテル兼レストランの職場で客室の営繕をしていたのだ。5才と10才くらいの二人の男の子の母親なのだが、子供たちも職場に連れて来ていて、兄の方を雑用係として働かせてもいた。アメリカで以前メイドとして働いていたとかで、英語はネイティブであり従ってこの難解な本でも読めたのだろう（にも拘らず初対面の折り、それなら英語は堪能ですなと

聞いたなら「ア、リトル」と彼女は答えたのだ。まったくやつてられない……。難解というのは俺にとつてはという意味で、中はやたら綴りの多い形容詞が多様されている。持ち歩いてきた豆単の辞書では綴りの数が及ばなくてページが進まなかった。しかし出だしの箇所を訳しただけでもスウェーデン特有の淡い夜明けの光を詩的に描いていて、およそ秀作のほどがしのばれる。なぜ彼女がこの本を俺にプレゼントしてくれたのかはわからないが、好意だったのは違いない。ところが、である。実はこの本をきっかけにこのあと俺はとんでもない窮地に陥ることとなるのだ。その顛末は後述するが人の好意や、シリアスな恋愛を描いているであろう、作家の真心がこもった名作などを、故意にはないが、おちよくなるような真似をするとうなるか：赤面の部位をこのややあとに書かねばならない。

しばしのレンタルを告げて彼が立ち上がるうとした際にひとこと云った。「トコロデナニカイイニオイガスルネ」と。俺はもうすでに気づいているのだらうと思ひ、軽い乗りで寝台下のカーテンを開けてみせる。「OH MY」とスマイリーに云ったがその「お

や、まあ」の真意のほどは計りかねた。たぶん許してくれたのだらう。チャンドリカは自部屋へと戻って行った。

彼が去ったあと違法な食事の続きを終えて俺はその晩早々と寝床に入った。朝が早いことを鏡師から告げられていたのでそうしたのだ。しかしチャンドリカに語ったことが頭の中で踊ってなかなか寝付かない。この一年半実に多くの場所を巡り過ぎた。横浜を船で発ちシベリア鉄道を使って欧州に。間に現地でのバイトをいくつか挟んで一年半を過ごし、中近東・インドを伝ってここまで来たのだ。その間何を経験し、いま何が残っただろうか。そこには外国ゆえの生活の逼迫ばかりがあっただけ（？）なような気もする。ランボーはどこに行っただけ？胸に期した新生はどこへ逃げた？結局俺のしたことは無意味だったのだらうか。心中のカオスの中でひとつだけ鮮やかに蘇る光景があった。アフガニスタン・ヘラートで見たあの満天の星空：シヨックだった。このカオスがいつか晴れて魂はあの星空へと舞い上がれるものだろうか。その心地よいイリュージョンを想ううちに俺は眠りの中へと落ちて行った…。

(※アフガニスタン・ヘラートで詠んだ詩を記す)
「アフガンの夜」

魅せられしはアフガンの夜。

星の光のあまりの明るさ、美しさに、

わがこころ驚き、すなわち哭きぬ。

斯くも静謐なる光を受けるなら

妖精らも出でむ、月の女神も舞い降りむ。

幼子に戻るか、伽の世界へ行くか、知らず。

現し世のすさみから放たれ、

原初の世界へ誘われんとする、そは魔法なめり。

女神よ、舞え。妖精(こ)らよ、遊べ。

もの皆なべてこの光のもと安逸たれ。

我とてもえやは受けざらん、この原初のやさしき光。

ムーンシャワー、スターダスト浴びるがに。

国の人あらば見せまほしきよ、また語りまほしきよ、

我らが国の夜空(そら)は空にあらずと。

失われおりしはこの満天の星空、それに比すべき我
らが清心たりき。毒心、邪心、欲念、もろもろの不
浄、この光のもと、みな洗い流さばや！

流れ来るコーランの祈り声に、回教徒ならずとも額
づき、また起きては、その声がむた星の世界へと飛
びたたざるや。

かくこそ思われ、このアフガン夜空に：

